コンパクトシティー、10年の成果は

グローカルインタビュー

富山市長

森　雅志氏

もり・まさし　1952年富山市生まれ、中央大法卒。77年司法書士・行政書士事務所を開設。95年富山県議に当選。旧富山市長を経て、2005年に合併後の富山市長に当選。現在３期目（通算４期）。好きな言葉は知行合一（行動が伴わなければ、真に知っているとは言えない）。尊敬する人物は小村寿太郎と杉原千畝。趣味は登山やサックス。昨年末からストレッチに凝り、富山市内の個人スタジオに定期的に通う。韓国語やイタリア語会話も勉強している。62歳。

人口の社会増や地価反転 課題は防災・高齢化対応

都市の諸機能を中心部に集めるコンパクトシティー。人口減が進む中で都市運営の効率を高める施策として全国で注目されている。富山市の森雅志市長は2005年に現在の富山市が誕生して以来、コンパクトシティー推進の旗を振ってきた。10年後の今、地価の反転や社会増など目に見える成果も出ている。OECD（経済協力開発機構）や米ロックフェラー財団など海外からも注目を集める。３月に開業した北陸新幹線でますます脚光を浴びる富山市。森市長にコンパクトシティーの10年とこれからを聞いた。

Q 国土交通省が３月に発表した公示地価（2015年１月１日時点）によると、富山市の地価（全用途）は23年ぶりに上昇に転じた。その原因をどう見るか。また市民の意識に変化はあるか。

A 率直にうれしい。砂に水をまくような分散した公共投資では地価は全体に下がってしまう。一番高い場所に集中的に投資することで地価が維持され、上昇する。固定資産税や都市計画税の増加になり、表面的に投資に温度差があるとしても、最終的にその恩恵は全市民に還元される。口を酸っぱくして言ってきたのでご不満な人はいるが、ある意味でそうだよねと消極的な理解者が大多数になったと思う。結果的に平均地価が上がったということは、市民にとって「なるほど。それはよかった」ということになって、それが最終的には市民一人ひとりの自信やシビックプライドの醸成につながると思う。これが大事で、市民の意識は10年間でだいぶ変わってきた。

例えば10年前の富山市だったら、お客さんがタクシーに乗って、どこかいいお店に連れて行ってよと言うと、「富山にはあんまりいい店はありません」ということを、タクシーの運転手は平気で言っていた。今ではだれもそんなことは言わない。「だったらここはどうですか」とか、「ちょっと足を伸ばせばここはどうですか」などと言う。そ

禁複製・無断転載

こが大きな変化だと思う。

Q 富山市がまとめた14年の人口動態では、市の人口は２年ぶりに650人の転入超過（転入者数－転出者数）になった。全国的に人口減が進む中でこちらも明るいニュースだ。その原因は何か。

A ７年前から転入超過の傾向が出ていた。２年前は一時的に転入超過にはならなかったけれども、その前の５年間は転入超過だった。今年はもっと増えて700人を超すだろう。富山県内の近隣の市町村から呼び込んでいるのが大きいと思う。富山県全体でみると何も変わらないとの指摘をする人もいるが、間違っている。強い吸引力を持つ中核の自治体は必要で、そうでないと県全体の人口はますます減少する。吸引力が強いから県内からも吸引するけれど、県外からも呼び込める。

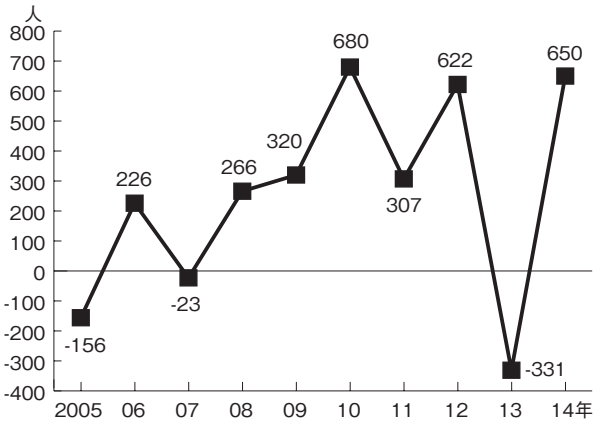
しかし北陸全体で見ると、やっぱり東京に少しずつ吸引されている。「人口力」というものを少しでも発揮して、たとえ減少するにしても緩やかに減少するという吸引力が出せる都市は、その力をしっかり発揮することが必要だ。

路面電車、南北一体化を

Q コンパクトシティーを政策の重要な柱に掲げる富山市としては向こう３～５年先を見た場合、人口力を強化するため、何をすべきか。

A 一つは今までやってきている、公共交通を軸にしたコンパクトなまちづくりをぶれずに進めていくこと。特に４～５年先を見据えて、JR富山駅を挟んで路面電車が南北に分断されている状態を解消して、南北の路面電車を一体化させることだ。それに加えて、富山市は細かい政策をいっぱいやっているが、これも継続する。例えば、祖父母が孫やひ孫と公立の博物館などに一緒に出かけると、入館料が無料になるとか、花束を購入して路面電車に乗ると運賃が無料になるとか、

図　富山市の社会動態の推移（転入者－転出者）



色々なことをやっている。それは市全体のおしゃれ感を出すのが狙いだ。15年12月末までは市内のホテルや旅館に宿泊する観光客などに対しては路面電車の無料利用券（２回乗車分）を提供している。そういうのはある種の吸引力をつくるためにやっている。東京からの出張者が富山のホテルに泊まったら路面電車が無料になったと、ご自分の会社で話す。「へ～、それは面白いね」ということで富山を訪れる人が増え、吸引力につながる。

あとは、他の地方都市と比べて特徴的なのは街の中を花で飾っている、市議会の中には反対する意見もあるが、街を花で飾り、いつでもきれいにしておく。自転車の共同利用システム「アビレ」だって、利用頻度だけを考えて、費用対効果を議論していれば割に合わない。しかしあれは街を彩るツール。ああいうものがあることが都市の魅力を高めて、それが人口力のアップにつながっていく。

今年度に新たに始めたいくつかの施策の中には、例えば、ひとり親世帯が働きやすい都市を目指そうというものもある。富山市以外の職場に勤めている人にもどこで暮らすかの選択肢を考えるときに、ぜひ富山市で住んでもらいたい。

ライフスタイルにも刺激

Q 富山市のコンパクトシティー政策は全国的にも注目を浴び始めた。コンパクトシティーを目指した10年間をどう総括するか。

禁複製・無断転載

富山市中心部に完成した再開発ビル「TOYAMAキラリ」

A 都市機能の希薄化を防ぐことが狙いだったのか、という市民の声をよく聞くようになった。人口の社会増や地価の反転などで目に見える成果が表れてきたため、理解が深まってきたようだ。

ただコンパクトだからといって、なにもかも中心部に集めるわけではない。地域の拠点同士をつなぐ。富山市をこれ以上拡散させてはいけないということが市民にわかってもらえるようになってきた。交通政策に特化してきたように見えて、それは一人ひとりのライフスタイルにも刺激を与えてきた。それが健康にも影響していることについての理解が少しずつ広まってきた。それが持続性の高い街になっていく。自分もたまにはバスや路面電車で行こうとか、家族で行くから公共交通で行って、帰りは食事して帰ろうとか思う人が増えてきているのだろうと思う。それこそが、ある意味のコンパクトシティー政策の向かうところなので、いい状態かなと思う。

４～５年後に南北がつながって、LRT（次世代型路面電車）のネットワークが完成すれば、相乗効果でかなりの人が動き出すと思う。こういうことが企業からみた評価にもつながる。大手製薬会社の研究機関は、設備投資を行う時でもそういうことを視野に入れながら、ここに研究棟を造ろうとか、社員の社宅はこの辺りだとか、公共交通を使って通勤すれば、１戸に２つの駐車場が付いている社宅は不要とか、そういうことを考えるようになっている。もう少し完成度をあげて、コンパクトシティーの方向性を明確にすることで、企業誘致にもつなげたいと思っている。

ただそうはいっても、市内には企業に分譲すべき用地がない。北陸農政局は富山高岡広域都市計画区域内の約60haを農地転用の予定面積にすると聞いている。これから富山県を中心に農政局との協議で決める。一般論でいうと、射水と高岡の両市には未分譲の企業団地があり、富山市に配慮していただける可能性は高いと思う。ただ（広域都市計画からの離脱問題にも発展した）一昨年のいきさつもあることから、デリケートな問題だ。広域調整での県のリーダーシップに期待したい。

自然災害や高齢化などへの備えで先行する「レジリエント（しなやかな）」な街づくりにも取り組む。６月をメドにCRO（チーフ・レジリエント・オフィサー）を任命する。富山市を「100のレジリエント・シティー」に日本で唯一選んでくれた米ロックフェラー財団も含めて、決定する。CROの人件費や出張の旅費などはロックフェラー財団が負担してくれる。４月１日付で創設した未来戦略室が中心となってロックフェラー財団やOECDとの交渉を行う。CROのポストは副市長よりは下だが、特別職の政策監よりは上だ。任期付きで外部から招くことになる。腹案はある。

質問を終えて▶▶

地方自治の世界でコンパクトシティーという言葉を定着させた立役者の１人といってよい。地価や人口の社会増などで成果も表れているため、コンパクトシティーを語る表情は自信に満ちている。コンパクトシティーについては、都市中心部への過剰な投資だ、周縁部をないがしろにしているという批判もある。しかし総曲輪や西町といった富山市中心部で組合施行の再開発が相次ぎ、それが街をよみがえらせていることはだれの目にも明らかだ。３月14日に開業した北陸新幹線との相乗効果も期待できる。金沢市とは違った意味で北陸のコアシティーとしての地歩を固めつつある。一部の施策を巡っては、石井隆一富山県知事との間ですきま風も吹くが、北陸に活力を取り戻すためにもお互い連携してほしい。

（富山支局長　**吉田　力**）

禁複製・無断転載